

ポジティブ行動支援

実践事例集Ⅲ



01

中学校におけるポジティブ
行動支援の取組
(1・2ページ)

02

ポジティブ行動支援の
考え方を取り入れた授業改善
(3・4・5ページ)

03

実践が進む各学校紹介
(6・7・8ページ)

04

PBSの組織体制づくり
校長先生からの寄稿
(9・10ページ)

日本でのPBSの最前線、徳島！
県内各地・各学校において取組が広がっています。「学習指導」「学級経営」「特別活動」など、さまざまな場面でポジティブ行動支援の考え方が用いられています。今年度の取組の一部をまとめました。
子どもと先生が笑顔で学校生活を送るためのヒントを詰め込みました。是非、開いてみてください。

中学校におけるポジティブ行動支援

ポジティブ行動支援（PBS）は小学校だけでなく、中学校・高等学校でも実施可能かつ効果が実証された取組です。実際、国内においても、最もPBSの普及が進んでいるのが中学校であるという地域があります。それらの学校では問題行動の減少や不登校予防、また生徒の心理面の困難さの減少といった様々な効果が報告されています。「PBSは、主に小学校向けの取組」と誤解されることもありますが、具体的な取組内容は多少違ったとしても、「生徒の望ましい行動を増やしていくこと」、「望ましい行動を引き出すための環境を整えること」、「望ましい行動ができた際にはポジティブにフィードバックして達成感につなげること」の重要性は、中学校においても変わることはありません。

また、中学校においては、学校全体で期待される望ましい姿・行動が何かを考えることに生徒がより主体的に関与したり、望ましい行動をとりやすい環境を生徒自ら考えたりなど、生徒の主体性を重視した取組がより行いやすくなります。教員の指示に従うだけでなく、生徒達が主体的によりよい学校づくりをめざすことを、教職員がサポートするという形です。

さらに中学校では、特に同じ学年の教員間で「チームとして組織的に動く」という文化が既に存在していることが多く、PBSを学校全体で組織的に行っていく上で、この文化は非常に効果的です。



マトリクスに生徒の意見を反映させる

生徒の意見をPBSの取組に反映させる上で、主に次の三つの点から生徒に意見を尋ねるとよいでしょう。

- ① ポジティブ行動マトリクスの作成
- ② 望ましい行動の引き出し方・フィードバックに関する計画作成
- ③ 行動の記録を取る

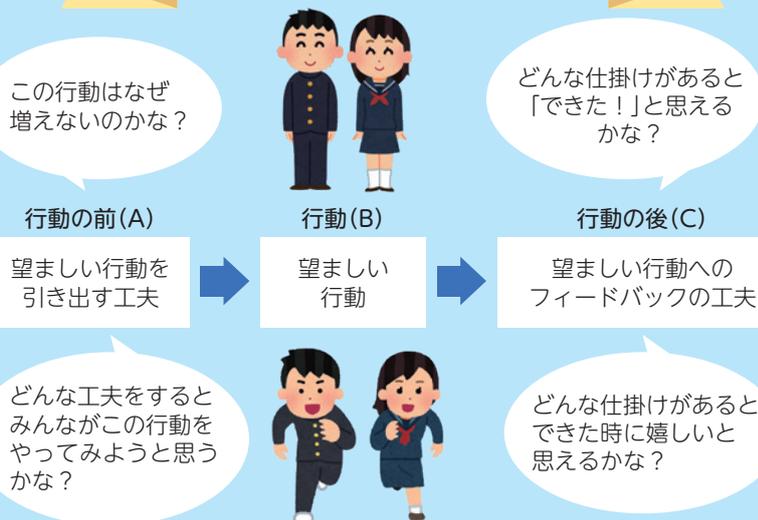
「① ポジティブ行動マトリクスの作成」については、教職員でマトリクスの原案を作成した後、生徒の意見もぜひ取り入れましょう。例えば、生徒会メンバーに意見を聞くのもよいですし、あえて行動面に課題のある生徒の意見を取り入れるのもよいでしょう。多様な意見を反映し、皆が合意形成できるマトリクスを目指しましょう。

- ▶ 教職員が何を考えてマトリクスを作成したのか、その「想い」を生徒と共有する
- ▶ マトリクス（行動目標設定表）の原案を共有する
- ▶ その上で、例えば下図のように話し合いを行い合意形成を図ると良いでしょう



支援計画作成や記録にも生徒の参画を

「② 望ましい行動の引き出し方・フィードバックに関する計画作成」③ 行動の記録を取るについては、行動のABCに基づいて、どのような工夫があると目標とする望ましい行動をとりやすくなるか、どのようなフィードバックがあると達成感があつてその行動を続けようと思えるか、またどのように行動の記録をつけられるか、などについて生徒の意見を聞いてみましょう。生徒会や委員会活動と連携させると、教職員の負担をあまり増やさずに行うことができます。

望ましい行動を増やすための
計画作成に生徒の意見を反映させる

藍住中学校では、昨年度に引き続き、大阪教育大学の庭山和貴先生からアドバイスをいただきながら、学校規模でポジティブ行動支援（SWPBS）に取り組みました。

マトリクスの共有

昨年度、生徒会役員たちで、ポジティブ行動マトリクスを作成しました。作成したポジティブ行動マトリクスは、職員室前や各学年フロアなど、教員と生徒の目に入る校内の至る場所に掲示しました。また、「何事にも挑戦！P（パワフル）S（スキルフル）H（ハートフル）を中心に進化する藍中！」とスローガンを掲げ、PBS旗の掲示も行いました。

こうした掲示物を校内に充実させることによって、教員・生徒、双方にとって日常的に目標を共有することができました。



ポジティブ行動マトリクス
職員室前の掲示コーナー
校内の至るところに掲示

階段に掲示された旗
校内2箇所に設置
PBS旗

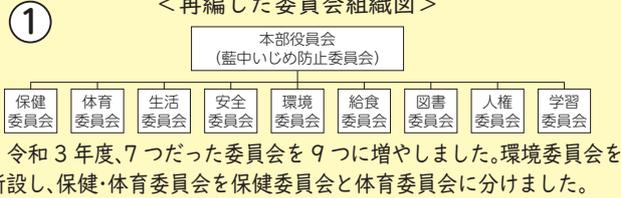


※「ポジティブ行動マトリクス」については、「実践事例集Ⅱ」を参照。

委員会活動の再編・マトリクスの活用

今年度の取組は、活動の幅を広げ、各委員会・本部において一年間で学校のためにやりたい目標を決めました（わくわく活動）。その目標はポジティブ行動マトリクスの「3つの大切」の何に当たるのか生徒たちで考えました。次に抽象的な活動目標を具体的な行動計画に置き換えていきました。

<再編した委員会組織図>



② 各委員のわくわく活動

本部役員会 (校則検討)	生徒や先生が安心し、笑顔で過ごせる学校を目指して、時代に合ったきまりを検討する(ハートフル)
本部役員 (学校行事検討)	他学年と交流して新たな方程式を作り出す(スキルフル、ハートフル)
保健委員会	自分自身と相手の健康を考える(パワフル、ハートフル)
体育委員会	体づくりの機会をみんなに与える(パワフル)
生活委員会	当たり前のことができる藍中生に(スキルフル、ハートフル)
安全委員会	地域の安全と防災(スキルフル、ハートフル)
環境委員会	地球上に優しい環境づくりを考えていこう(ハートフル)
給食委員会	楽しい給食の時間にしよう(ハートフル)
図書委員会	みんなが好きな本を見つけられるように活動しよう(ハートフル)
人権委員会	一人一人が安心して意見が言える(ハートフル)
学習委員会	学習意欲を高めて学力向上を目指す(スキルフル、ハートフル)

まずはしたいことを考え、マトリクスに当てはめました。

①

本部役員会 (校則検討)	生徒・保護者向けアンケート並びに地域の声インタビューの実施。結果をもとに、校則改定の要望を行う。
本部役員 (学校行事検討)	生徒会レク大会開催。
保健委員会	睡眠の効果を調べ、「全校お昼寝タイム(仮名)」の実施計画書を作成して、学校側と協議を行う。実現すれば、アンケート等で藍中生に対するお昼寝の効果を検証する。
体育委員会	学年ごとの球技大会の実現。
生活委員会	ペットボトルキャップで「世界の子どもにワクチン」活動。
安全委員会	「町の安全箇所マップ」「子どもの目線の防災マップ」づくり。
環境委員会	除草作業で集めた雑草を利用した堆肥、落ち葉を利用した腐葉土づくりや校内の清掃活動。
給食委員会	毎日の給食時間の放送。パン・牛乳の残食調査をし、クラスごとに掲示物を作成。調理員さんへのお手紙の作成。
図書委員会	読みたい本のアンケート実施。おすすめの本のPOP&ポスター作成。おすすめの本を紹介しようの放送(予定)。図書室を利用しやすくしようのポスター作成。
人権委員会	人権啓発動画の作成。
学習委員会	給食時に学習についての放送。ワークルームにクイズを掲示。家庭学習の手引きの作成。

③ わくわく活動を具体的な行動レベルに落とし込み、必要な活動を考えました。

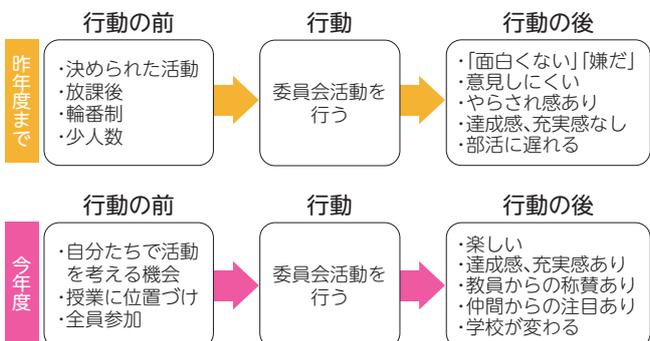
生徒主体の委員会活動

大切にすることは、生徒たちの主体性を引き出すことです。従来の「決められた」「面白くない」委員会活動ではなく、一人一人が学校を変える主役になれる環境づくりでした。そのために、下図のように、生徒の取り組みたいことについて幅広く意見を集められる工夫をしたり、できていない活動に対してポジティブにフィードバックすることを心がけたりして、生徒の主体性を引き出し、達成感を感じられるようにしました。

こうして生徒会専門委員会の活性化を図りました。

生徒の声から見る学校の変化

- 自分たちが活動を起こすことにわくわくして楽しかったし、楽しみだった。
- 大変なことも多かったが、学校がさらに良くなる活動ができた。
- 自分たちで考えた企画を行動に移せたことが良かった。そして、行ったことが、少しでも学校のためになっていたら嬉しい。
- 今までよりも積極的に取り組むようになって、委員会活動の楽しさを知った。
- 去年よりいい委員会になった。
- 他学年との交流が増えた。



監修 庭山 和貴 (大阪教育大学准教授)

高川原小学校では、大阪樟蔭女子大学の田中善先生からアドバイスをいただきながら、ポジティブ行動支援（PBS）の手法を活かした授業改善に取り組みました。

私の学級の課題は「メリハリがつかないこと」です。よく話を聞き逃していることがあります。



長澤 聡史 教諭

人懐っこかったり、質問に対してのリアクションが良かったり、良い面もたくさんあるのですが、その反面、行動面での問題もあり、自分で考えて行動できるように努めてほしいと思っています。

一回目のコンサルテーションでは、算数科の授業を田中先生に見てもらい、次のようなアドバイスをいただきました。

よく聞き直している児童がいます。先生が話を始める前に注意を喚起する言葉かけをするだけでもずいぶん変わりそうです。加えて、先生が授業で教えたいことがどれだけの児童が理解できているか確認する問題を実施しましょう。



(1時間の授業の時間マネジメント図)

授業で教えたいことがどれだけ理解できているか確認するため、確認問題に取り組む時間を設定することにしました。授業の最後に行く確認問題を一人で解けるようにするためには「下ごしらえ」が大切です。確認問題までに、どのようにして学級の児童たちを「わかった、できた」の状態に導けばよいのか考えました。「教えることは何かを明確にして授業にのぞむこと」「具体的な発問や指示」「練習時間の確保」「ペア学習」「前時のノートを活用」など、様々な工夫を一時間の授業の中に取り入れました。

注意喚起の原則



助言を受けて、発問する時には、児童の注意を引きつけてから話し始めるように意識しました。それまでは、「聞いている児童は聞いている」「聞いていない児童は何をすればよいのか分からない」といった状況がありました。しかし、聞いてほしい時には注意喚起を行い、全員が聞く姿勢になるまで待つことで、結果的に児童の聞き逃しや聞き直しがなくなりました。話し始める前の工夫一つで児童が変わることが実感できました。

自力解決のための下ごしらえ

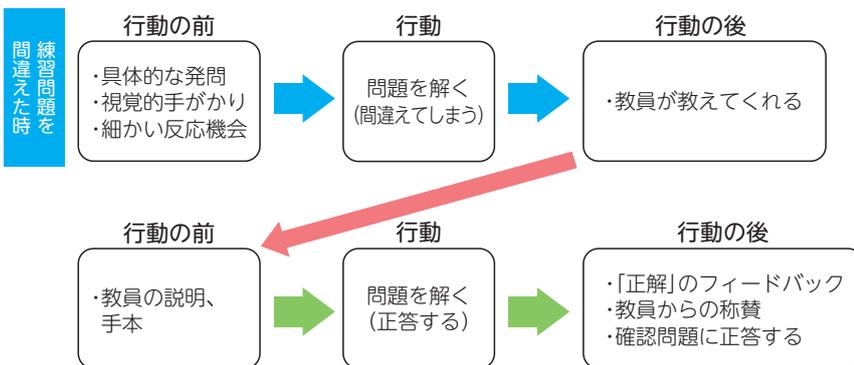
確認問題の前に練習時間を確保し、間違えている児童を支援していくことで確認問題の正答率は上がっていききました。



二回目のコンサルテーションは、授業の動画をもとにアドバイスをいただきました。

児童が確認問題までに間違えてしまった時は、どうしてもできるようにするのが正しく教えましょう。

「教える」→「解いてもらう」→「できたら称賛」この三つを一セットにすることが大切です。「できたら称賛」が忘れやすいので注意してください。



見安小学校の事例

全員が「できた」で授業を終える

見安小学校では、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、ポジティブ行動支援(PBS)の手法を活かした授業改善に取り組みました。



伊勢 大毅 教諭

私の学級では、授業中、一部の児童しか反応しなかったり、理解できる児童と、理解が難しい児童がはっきりしていたりしました。

また、授業で取り組んだ問題が授業時間内に終わらずに、休み時間も、問題を解いている児童も多く、どうしたら授業時間内に全て終わらせ、児童の理解をそろえることができるのか課題であると感じていました。

一回目のコンサルテーションでは、算数科の授業を見てもらい、次のようなアドバイスをいただきました。

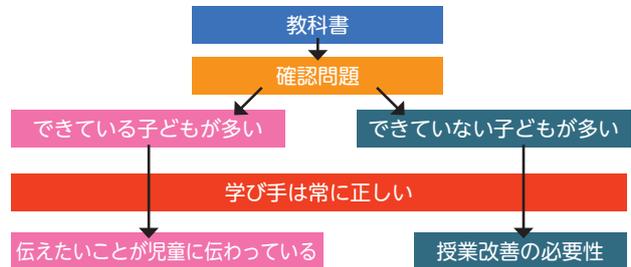
一時間の授業で学ばべきことが学べたのか確認できる問題に取り組みましょ。

全員できていたら、その授業はうまくいっているということ。逆にできていない子が多かつたらその授業には伸びしろがあるということですよ。

教科書のジャンプ問題(最後の問題)は気をつけてください。



確認問題の実施



アドバイスを受けて、授業の最後に確認問題を実施し始めました。確認問題とは、授業終盤に1時間で学んだことができるか確認する問題のことです。

問題を一問程度設定し、「一人でできた○」「間違えたが、訂正できた。支援を受けてできた△」「最後までできなかった×」として記録を取りました。記録を取ることで、自分の授業を客観的に評価できるようになり、授業改善につなげることができました。児童がどこで間違えたのかを把握することにより、「具体的な説明が足りなかったのか」「練習時間が少なかったのか」など原因を考えて対策をとることができました。

ジャンプ問題への対応

教科書のジャンプ問題(最後の問題)には、既習事項ではあるが、本時では取り扱わない内容が含まれることが多く、難易度が高くなっていることがあるので、事前に問い方や数値をシンプルに変えるなどの練習問題に取り組みました。その上で、最後の問題を「できた」と感じさせることで、より意欲的に授業に参加できるようになってきました。

最後の問題ができなかった時



最後の問題ができた時

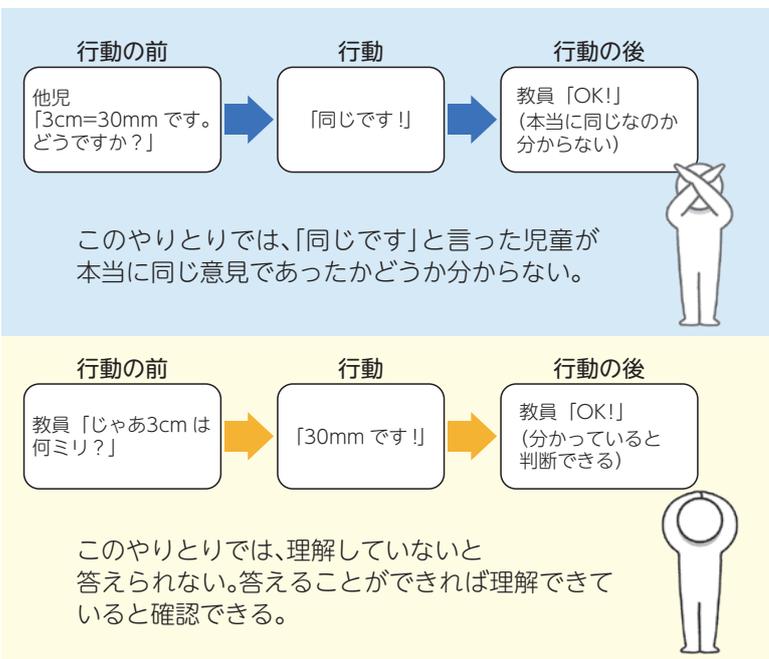


二回目のコンサルテーションは、授業の動画をもとにアドバイスをいただきました。

児童が発表した後に、他の児童がよく「同じです」と言っていますが、本当に同じかどうかは分かりません。児童同士お互いに確認するなどして、授業の中で細かく児童を動かすことにより、本当に理解できているか確認することができます。

「わかりました」「同じです」で安心しない

児童たちの「同じです」や、「わかりました」の言葉を引き出すのではなく、左の図のように、児童が理解しているのが確認できるよう、質問の仕方を変えて確認していきましました。



児安小学校の事例

ポジティブベースの児童理解

児安小学校では、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、**特別支援学級**でのポジティブ行動支援（PBS）の手法を活かした授業改善に取り組みました。

児童同士のトラブルが減ってほしいなあ。
学習準備、もつと整わないかなあ。



大木 宏美 教諭

一人の児童が授業中の立ち歩きや感情の波が大きいので他の児童とトラブルになりやすいんです。毎日のように喧嘩があつて対応に困ります。
授業中は、自立的に課題を行わせると集中力が切れやすくて…。もつと頑張つて欲しいんだけどなあ。

一回目のコンサルテーションでは、算数科の授業を田中先生に見てもらい、次のようなアドバイスをいただきました。

注意喚起（「先生話すよ」など）はできているので、その後できていない子を注意するのではなく、できている子を認めて褒めていきましょつ。



できなかつた時に「すみません」と言わせることよりも、どうすればできるようになるかを考えてみましょつ。

教室は「できている」にあふれている

これまでは教室の中でつい子どもたちの問題となる行動に目が行くことが多かったです。一方で、児童のたくさんのできている行動を「当たり前」のこととして、認めていないことが多かったように思います。

そのような教室の当たり前にできていること（行動）に注目して称賛していくようにしました。例えば、教員が発問した時に反応しない児童を注意するのではなく、まずは反応できている児童に注目することを大切にしました。そうすることで、児童は正しい行動がはつきりしたり、自分に自信を持つことができるようになったりしました。

こうすればいいのか！
褒められる！嬉しい！
頑張ろう！
授業が楽しい！

良い姿勢！
ノート書けてる！
反応いいね！
「話すよ」で向けたね！
良い意見！



少し視点を変えるだけで、驚く変化！
児童も教員も授業に積極的に臨めるようになりました。

授業に臨む態度も良くなり、テンポ良く授業が進められるようになり、聞く姿勢や発表、学習準備まで良い効果が表れるようになりました。教員は、いいところ探しをするようになりました。

授業中の技

授業をテンポよく進めるために、授業の中に様々な工夫を取り入れました。発問を精選したり、教材教具を工夫したりして、より分かりやすい授業を目指しました。

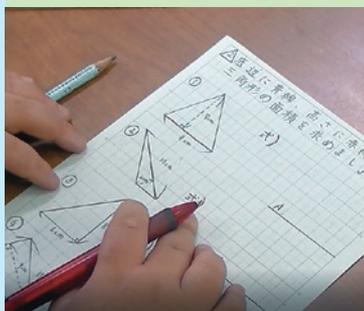


【貼り物】

児童に問題を書かせる時間がかなり過ぎるので、ノートに残しておきたいものは、貼り物を配付してノートに貼るだけになりました。大幅な時間短縮ができ、その分、問題を解くことに時間を当てることができました。

【オリジナル問題】

教科書の問題の問いや数値を変えるだけでも分からなくなる児童も多いので、自力で解ける達成感が味わえるように、シンプルなオリジナル問題を用意しました。



【メガホン】

発問したら決まって一人の児童が答えてしまっていたので、メガホンを作って小声で答えるようにしたところ、全員の見聞が聞けるようになりましつた。少しの工夫で子どもが変わることを実感しました。



監修 田中 善大（大阪樟蔭女子大学准教授）

ハートの付箋で望ましい行動を褒める

高越小学校では、「あたたかな仲間づくり」をテーマに、教育実践を行いました。その取組の一つとして、PBSの手法を取り入れたGBF（グッドビヘイビア付箋）を使った取組を行いました。

「友だちに優しく声をかける」「チャイムの合図を守る」など望ましい行動を見かけたら、その場で褒め、ハートの付箋にその児童の名前と望ましい行動の様子を書いて職員室の担任の机に貼っておきます。担任は、その付箋の内容を帰りの会で学級のみんなに紹介し、付箋を各教室に掲示しました。

取組の期間は一ヶ月と設定し、終了時に付箋が十枚以上貯まった児童は、校長先生が朝会で表彰しました。また、教室で掲示していた付箋は、全校児童が一番目にしやすい児童玄関前に移して掲示し、児童が付箋の内容を目にする機会をつくり、次につながるように意欲付けを図りました。



GOOD Behavior賞状

各学年が集めた付箋



03

実践が進む各学校紹介

モデリングビデオの作成と活用

五年生の児童は、総合的な学習の時間や国語科等で、「廊下の歩き方」等自分たちで考えた望ましい行動のモデリングビデオを作成しました。モデリングビデオを作ることで、自分たちの行動を見直したり、望ましい行動を練習したりすることができました。また、それを見る他の学年の児童に、視覚的に示すことで、望ましい行動の具体化や意識化を図り、GBFにつなげることができました。

取組をおして、全ての教員で全校児童の良さを伝え合うことができました。児童はたくさん先生の良さを認めてくれることや友だちの良さに気づくことができ、あたたかな仲間づくりの実践が深まりました。

取組の明確化

板野南小学校では、今年度「みなみWAプロジェクト」の第四弾として「ありがとう」に着目し、「伝えてすっきりありがとう もらってにっこりありがとう 心もほっこりありがとう」をキャッチフレーズに学校内外において感謝の気持ちを育むように取り組まれました。

今年度まず取り組んだのが、校内の教職員の意識をそろえるための実施計画書の作成です。実施計画表を作成することによって「だれに（が）」「何を」「どうして」「いつから（まで）」などが明確になり、指導をそろえることができています。

みなみWAプロジェクト No.4 「ありがとう」実践例

具体的目標の実施計画表

- 1 教える望ましい行動目標を決めよう
周りの人に伝えられていることに気づき、感謝の気持ちをもって「ありがとう」が言える。
○ 伝えて すっきり ありがとう！
もらって にっこり ありがとう！ 心もほっこり ありがとう！
- 2 児童に伝える「この行動を学ぶ理由」を考えよう
自分の生活がなっているのは自分だけの力ではなく、周りの人の支えがあるからということに気づける人になってほしい。
・賞状に感謝の気持ちをもって、「ありがとう」という言葉を伝えることで、人とよりよくなることを実感してほしい。
- 3 具体的な行動モデルを示しましょう
良い例
・自分のために何かをしてもらったから、すでに「ありがとう」が言える。
・相手の目を見て、両手に声で言う。
・「ありがとう」を言ってもいいから、「どういたしまして」の言葉や笑顔を示す。
悪い例
・不必要に大きな声で「ありがとう」を言う。
・相手に聞こえない声で「ありがとう」を言う。
・「ありがとう」と言ってももらって、知らん顔をする。
- 4 実行にすすめるための具体的計画を立てよう
◎全校集会（9月12日）の機会を利用して、校長先生から全校の目標としてみんなががんばっていることを伝えよう。
◎学習室で、希望する「ありがとう」の場面を教員が思い、記録したものを教室で共有する。
◎期待される行動の手がかりを作成しよう
・キャラクターを活用しめあてを指示する。
・「ありがとう」についてのアンケートをとる。
◎児童が自ら取り組む行動について計画しよう
・教師だけでなく、家庭や地域についても感謝の言葉を伝える。
◎児童の行動改善を記録する方法を計画しよう
・帰りの会の時に「ありがとう」が言えた児童を挙手でカウントする。（自己評価）花丸
・「ありがとうございます」が言えた児童の割合を、週に1回記録し、進捗グラフに表す。（教師の評価）
- 5 望ましい行動に対する「ほめ方」を計画しよう
・校長先生に全校集会等でほめてもらう。
・「ありがとう」達成丸を校長室前に掲示する。
・「ありがとう」を言ってもらったうれしかった「ありがとうの花」カードを職員室前に掲示する。

実際の実施計画表

事前事後のアンケートの実施

取組を進める前に、現在学校でどれだけの児童ができていたのかを客観的に把握することも大切です。そして、取組を進めた後に再度状況を把握し、取組前と後でどれだけ変化があったのか比較することで、取組の有効性を測ることができます。

毎日の放送

朝の放送の時間には、放送委員会による「みなみWAプロジェクト」の放送を行いました。毎日「伝えてすっきりありがとう もらってにっこりありがとう 心もほっこりありがとう」のキャッチフレーズと頑張っている様子を放送することで、子どもたちだけでなく、教員も含めた学校内全ての人がキャッチフレーズを意識できました。また、日々の生活の中にある「ありがとう」の場面について考えることにもつながることができました。

校内掲示

職員室の前に「ありがとうの木」を作成し、「ありがとう」と感じた場面を花（カード）に書きました。児童は木を育てる意識でカードを書き、日常生活のさまざまな場面で感謝の心を広げるきっかけにできました。

みなみWAプロジェクトNo.4
掲示物



掲示物はみんなで作成し協力して作成し

スマイルリーダーという位置づけ

久勝小学校では、各学年・委員会が集まる代表委員会を通してスクールワイドPBSに取り組みました。代表委員会のメンバー（六年生）から三ヶ月毎に輪番制で六名の「スマイルリーダー」を選出し、校内の課題解決にPBSの手法を用いて取り組んでいます。

児童の課題意識から始まる取組

代表委員会では、スマイルリーダーからその時に学校に必要な取組を提案してもらい、形にするようにしています。教員から課題を与えるのではなく、自分たちで学校のために「できること」「したいこと」を考えることで、六年生は見本となるよう行動し、それを見た下学年の児童が真似をするといったプラスのサイクルを回しています。

代表委員会だより

トイレのスリッパを並べよう

六月は、「トイレのスリッパを並べよう」という目標が設定されました。その手立てとして、トイレ前に投票箱と投票用紙を置くようにしました。そして、「トイレのスリッパをきれいに並べている児童がいたら、投票用紙に記名し、投票箱に投票する。後日、集会で表彰を行う。」というものにしましたが、投票数が多すぎて表彰するのに困ってしまふという嬉しい誤算となりました。児童の望ましい行動を引き出す工夫が大切だと実感できました。

マスクをつけよう

十月は、「マスクをつけよう」という目標が設定されました。その手立てとして、各学級で「どうしてマスクをしないといけないのか」ということについて話し合い、その行動の必要性について、各々の学年に応じて確認しました。また、六年生が賞状を準備し、期間内にできている学級に対して、朝会で表彰するといった



取組を行いました。子どもたちは賞状をもらうために児童間で声をかけ合い、教員がマスクができていない児童を褒めることで意識を高めていきました。児童主体のPBSを行うことで、自分たちが学校をよりよくしているという実感をもつことができました。

児童と教員のかかわり合いを重視したあいさつ運動

高川原小学校では、学校全体で「自分からあいさつをしよう」という目標に取り組みました。行動目標を設定するときに、手がかりや教員の指標になるのが、「ポジティブ行動マトリクス」です。高川原小学校では、令和元年に作成し、学校全体や各学級において活用しています。ポジティブ行動マトリクスを作成することで、学校生活の中で具体的に何をすればよいかを明確にすることができるといふメリットがあります。マトリクスの中から今年度、学校全体で取り組もうと考えたものが「自分からあいさつしよう」という具体的な行動目標です。

	高川原 みんなでやろう プロジェクト		
	あ	い	う
登下校	目立たない声であいさつしよう 目立たない声であいさつしよう	目立たない声であいさつしよう 目立たない声であいさつしよう	目立たない声であいさつしよう 目立たない声であいさつしよう
授業中	授業中や休み時間に 目立たない声であいさつしよう	授業中や休み時間に 目立たない声であいさつしよう	授業中や休み時間に 目立たない声であいさつしよう
休み時間	休み時間や校庭で 目立たない声であいさつしよう	休み時間や校庭で 目立たない声であいさつしよう	休み時間や校庭で 目立たない声であいさつしよう
給食	給食の時間や 目立たない声であいさつしよう	給食の時間や 目立たない声であいさつしよう	給食の時間や 目立たない声であいさつしよう
その他	その他 目立たない声であいさつしよう	その他 目立たない声であいさつしよう	その他 目立たない声であいさつしよう

グッドビハイピア チケット (GBT)

「自分からあいさつをしよう」という児童の望ましい行動を引き出すために高川原小学校が用いた手立てがGBTです。GBTとは、あいさつができた児童に対して、教員が「良いあいさつだね」などの称賛と同時に渡すカードのことです。児童たちはカードを貰うことが動機づけとなり良いあいさつができるようになりました。

GBTに込めた思い

GBTには、良いあいさつができた児童の名前を書くようにしました。実施をしていく上で、先生方から「名前を聞いたり書いたりする時間がなければもっと配れる」という意見もありましたが、良いあいさつができた児童の名前を担任でない先生が聞いたり書いたりすることで、校内全体で取り組む一体感が生まれると考え、一手間を大切にしていきました。

- ルール①** 良いあいさつができた児童の名前を書く (分からない場合は聞いて書く)
- ルール②** できるだけ多く配る (一番多く配った教員には校長先生よりトロフィー授与)
- ルール③** 良いあいさつにアンテナを張る

取組共有と教員へのPBS

終礼などの時間を利用して各学級における取組の共有も大切にしました。うまくいっている取組を共有することで生まれる「真似してみました」を奨励したり、取り組んだ結果をポジティブにフィードバックしたりすることで、良い取組が学校全体に広がっていききました。また、一番多くGBTを配った教員に対して管理職からミニトロフィーの贈呈を行いました。児童と同様に教員へのPBSも重要です。

児童会役員を主体としたSWPBSの取組

長生小学校では、児童会役員が主体となって、令和三年度に「ポジティブ行動マトリクス」を作成しました。ポジティブ行動マトリクスの中から児童会役員が長期的に取り組む目標を決め、手立てを考えました。令和三年度は「あいさつ」、令和四年度は「廊下の歩き方」を目標に取り組みました。

環境設定

まず、取りかかったのが望ましい行動を引き出すための環境設定です。廊下に足型や矢印を貼ることで児童が右側を意識して歩くよう工夫しました。また、さらに階段の上りは「赤色」、下りは「黄色」と色分けすることで分かりやすくなりました。

呼びかけ

ポスターを作成し、校内の至る場所に掲示したり、放送委員会が校内放送で呼びかけたり、児童会が集会で呼びかけたりと学校全体で意識しやすいように仕掛けを設定しました。



▲児童会役員で作った
ポジティブ行動マトリクス



▲児童が「わかる」「できる」手がかり

アンケートの実施

取組前に児童全員に対して廊下の歩き方に関するアンケートを実施しました。そして、取組が進んだ後に再度同じアンケートを実施しました。その結果をグラフ化して校内に周知・掲示しました。こうすることによって、取組前と取組後でどれだけ効果があったのか明確になり、自分たちがどのくらいできてきている（できるようになった）のか視覚的に分かり、達成感につながることもできました。

集会で報告



集会で児童会役員から下学年の児童に対し、日々の廊下の歩き方についてポジティブなフィードバックを行いました。六年生から褒められることによって、下学年の児童は自信を持つことができ、さらに意識を高めることができました。

ポジティブ行動支援が育てる行動

ポジティブ行動支援では、教職員全員あるいは児童生徒や保護者も含めた学校関係者でポジティブ行動マトリクスを作成し、具体的な行動を決めて教育実践に取り組みます。選ばれる行動は多種多様で、あいさつや感謝することなど対人関係を良くすることにつながる行動や、廊下の歩き方や時間を守ることなど安心・安全な生活のためのルールを守る行動などが含まれます。

す。これらの行動は何らかの方法で記録され、教育実践の成果を記録の変化を元に評価し、児童生徒と教職員の頑張り、成長を認め合う学校環境を作っていきます。

これらの望ましい行動は、少し俯瞰して捉えてみると「学校環境を変える行動」とも考えられます。児童生徒は、教職員の指導や支援を受けながら、お互いにポジティブな声かけをして認め合ったり、安全・安心につながるルールを守る行動を増やしたりしていきます。ですが、これは「頑張り認め合える環境」や「安全・安心に生活できる環境」を構築することに貢献していることにもなるのです。つまり、児童生徒はポジティブ行動支援をとおして、自分たちが生活する社会（学校）を自分たちで創り上げていく方法を学んでいると言えます。

特に、委員会や児童会などで児童生徒が主体となってポジティブ行動マトリクスを作成する取組は重要です。今の生活環境（人々の行動も含む）のどこに改善が必要で、それらをどのように変えていけば良いのかについて、教職員の指導・支援を受けながらも自分たちで考え、実行し、成果を確認し合う経験は、「自分たちの社会は自分たちで創る」という意識につながり、社会を変える具体的な方法を学ぶことになるのです。

このような「主体的に学校を変える行動」というのは、ポジティブ行動支援の中では度々見られる行動なのですが、なかなか記録して評価することは難しく、児童生徒の行動変化としては見えにくいかもしれません。しかし、学校教育においても大切な変化であり、しっかりと認めていく必要があります。

これからの社会を生きていくために、学校教育をとおして児童生徒は「環境に適応していくこと」と同時に「望ましくない環境に気づき、環境自体を変えていくこと」を学ぶことが大切です。ポジティブ行動支援は、そのために必要な行動を育てることが可能なアプローチと言えるのではないでしょうか。

校内に推進チームを編成する

学校規模でPBSSに取り組む場合、まずは校内に推進チームを編成する必要があります。推進チームは、チームリーダーと数名の教員メンバー、管理職、また場合により保護者や生徒も加わり構成されます。

チームリーダーの役割は、

① PBSSを実践していく年間のスケジュールの調整

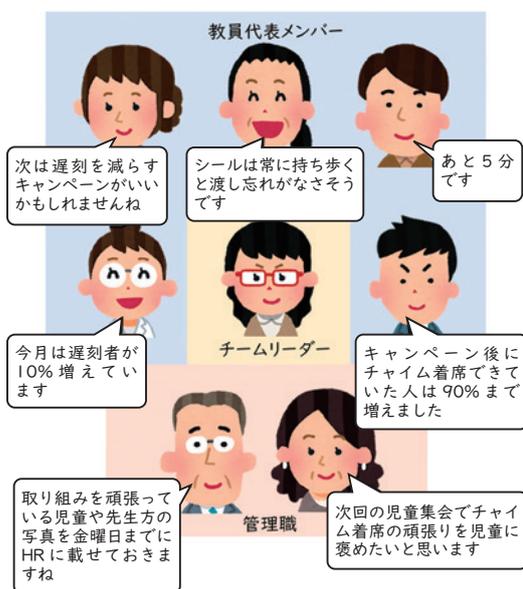
② PBSS推進チームの定期ミーティングの調整とファシリテーション

リレーション

③ 外部コンサルタントとの連絡・連携

などが含まれます。チームリーダーは校内で取組全体をコーディネートすることが主な役割となるため、PBSSに関する知識やスキルを備えていることが求められます。

教員メンバーは四〜六名程度で、各学年や委員会などから代表者を選出します。また、メンバーに養護教諭や生徒指導担当者などを含む場合もあります。教員の役割をできるだけ増やさないためにも、今ある役割と兼ね合わせられる形で工夫ができると思います。これらの教員メンバーが、学校全体で取り組む実践内容を決めて進めます。



推進チームが連動するイメージ図

管理職はPBSSに取り組む児童生徒と教員をサポートする重要な立場です。PBSSの成果や児童生徒に見られる日常での変化について、集会で称賛をしたり、積極的に取り組んでいる教員にはポジティブな言葉をかけたりします。また、地域や保護者に向けて学校での取組を発信することも重要な役割の一つです。

中学校などで、生徒主体でPBSSを進めるケースでは、推進チームに生徒が加わる場合もあります。また、保護者にも積極的に関与してもらうことで、PBSSの実践が家庭にまで広がります。

チームミーティングを効果的に実施する

推進チームは定期的にミーティングを開き、PBSSの実践が効果的に進められているか、計画されたおりの手順で進められているか、次にどのような実践が必要か、どの児童生徒に対してより手厚い支援が必要か、などを検討します。ミーティングを開く頻度は、目安として月一回程度とされていますが、毎月決まってミーティングを開くことが難しい場合には、学校全体でのキャンペーン等の取組を行う前や後、各学期末などのタイミングで柔軟に設定することも可能です。大切なことは、「やりっぱなしで終わらない」ことです。取組を行った後には振り返る機会を必ず持ちましょう。ミーティングに毎回時間がかかってしまったり、その割に何も具体的なことが決まらなかったりすると、ミーティング自体が苦痛になってしまいます。効果的にミーティングを行うためには、まず、始まりだけではなく終わりの時間も決めておき、必ずその時間に終わることが大切です。そのためには、あらかじめミーティングで検討すべき議題を明らかにしておき、議題ごとに話し合う時間を設定しておくといでしょう。誰かがタイムキーパー役をするのも一つです。また、会議の最後には次回までに行うタスク、担当者、期日を決めましょう。

データに基づく評価

ミーティングで重要なことは、データに基づき取組を評価すること、それを踏まえて次にすべきことを話し合うということだと思います。

【毎回の取組後に確認すること】

キャンペーン等の取組を行った際は、その取組によって変化すべきものが変化したかという「成果」を、データに基づき評価します。例えば、チャイム着席に取り組んだならば、取組前よりも後の方がチャイム着席ができていた児童生徒が多くなったかを確認します。もう一つ確認すべきことは、取組手順が決められたとおりに実施できたかどうかという「実行度」をチェックすることです。「チャイム着席ができた人にはシールを配る」という手順を決めたとしても、時間がとれずにシールは配れなかったということがあるかもしれません。この実行度を評価することで、仮にチャイム着席する人が期待どおりに増えなかった場合に、手続きそのものの見直しが必要（シールが褒美として効果的ではなかった別の褒美が必要）なのか、手続きを着実に実施できるようにするための（シールを忘れずに渡す）工夫が必要なのかが判断できます。

【年度末に確認すること】

一年間にわたり、PBSSの取組を行ってきた総合評価を年度末に行います。年度評価でも成果と実行度の二点に着目します。成果としては、例えばPBSSに取り組む目的に「生徒の自己肯定感を高める」ということがあったとすれば、アンケートを行ってその成果が得られたかを確認します。また、実行度については学校全体の一年間の取組についてTFIという尺度を用いて評価します。これらの評価に基づき、次年度に向けて、新たに改善していくべき点を明確化します。

※TFIとは、学校教職員がSWPBSの中心の特徴を適用しているかを測定するための、妥当で信頼性のある効果的な指標のこと

昨年度、高川原小学校に赴任したとき、学校教育目標の実現手段の一つとしてスクールワイドPBSの推進が位置づけられていました。子どもたちが将来よりよい人生を過ごしていくためには「自尊感情を高める」ことは大切だと考えていた私の思いとPBSの考えがマッチし、校内で引き続き取組を推進していくこととしました。

スクールワイドPBSに取り組んで一番感じることは、先生のまなざしに変化することです。先生が変われば児童が変わる。そして、学校が変わっていきます。

高川原小学校では、「あいさつ運動」に取り組んでいます。令和四年度は、グッドビヘイビアチケットを使った取組を行いました。この取組は、あいさつができてくる児童に対してチケットを渡して賞賛するというものです。子どもたちにも素敵ないさつができるようになってほしいという思いもありですが、先生方に完璧ないさつでなくてもいいので、あいさつができてくる児童に対して「チケットをたくさん配る」というミッションに取り組んでもらいました。先生の褒める場面が増えることで、必然的に児童の褒められる場面が増えます。すると、学校には児童の望ましい行動が増えます。先生からすると、褒めることで学級や学校が落ち着くのでポジティブな関わりが増えます。結果、児童は学校が居心地の良い場所となり、自分に自信が持てたり、自尊感情が高まったりします。

スクールワイドPBSの取組が一つのきっかけとなって、みんなで目標を共有し、取組を進めた結果、学校が少しずつ変わってきているのを感じます。

将来に向け幸せな社会を作っていくためには、自分たちが社会を作っていくという気持ちが必要です。その気持ちを育てるためには、子どもを育てる学校が、同じ方向性で子どもと関わり、組織の結束力を生かした取組を進めることが大切です。

時代が変わるとともに社会も変わります。教育においても同様に「昔はこうだった」ではなく、今を生きる現代に合った取組が求められているのではないのでしょうか。



昨年度、本校に赴任したとき、始業式で話を聞く姿勢に感銘を受けました。前任の校長先生からは、「生徒はとも落ち着いているのだが、あと一步が踏み出せないでいる」といったお話を伺いました。全国学力学習状況調査の質問紙で、「自分には良いところがある」に肯定的な回答をした生徒が、ここ数年をみても全国や県の平均よりも下回っていることに気づきました。そこで、徳島県が進めている「ポジティブ行動支援」の理念を活かすことが必要と考え、学校経営の中心としました。

第一に、全ての生徒が「自分は大切な存在である」と感じられることに重点を置き、具体的には、教職員から生徒へポジティブな声かけ、ボイスシャワーを学校全体で行うことと、掲示物を生徒の活動が見えるものに充実することです。また、ICTを活用して、玄関や各学年のフロアにモニターを設置し、生徒の活動の様子や笑顔がいつでも見られるようにし、「自分たちは大切にされている」というメッセージを伝えていきます。

第二に、三層構造の「第一層支援」を充実させることにより、主体性を育てることに重点を置きました。生徒会活動を主体的な取組にするために生徒会専門委員会を七つから九つに再構築し、さらに自己有用感を高められるよう、「わくわく活動」と称して、生徒自らが企画・運営する活動に取り組みしました。中でも、「藍中のきまり検討委員会」が取り組んだ校則の見直しは、大きく新聞に何度も取り上げられ、その成功体験はこれからの大きな力になったのではないかと考えています。

人はいろいろな面を持ち、得意なことと不得意なことがみんなあります。生徒に限らず、その人の良い面を発見し、ポジティブに捉えることは自分の良さにも気づくことです。ニコライ・ハルトマンの言葉に、「人間関係の不思議は、自分が相手の中にあると信じたものが、相手の中に育ってくる」というのがあります。たとえ今はいろいろな問題があったとしても、その子の未来を信じて声をかけることができれば、その思いはまなざしから伝わり、私は今までの体験から実感しています。もしかすると、「人間をいかに信じられるか」ということを私たち自身が問われているのかもしれない。

PBSの取組は前任校で二年間、板野南小学校で二年間行ってきました。PBSを進めて感じるメリットは、教員が子どもたちに望んでいる「望ましい行動」と子どもたちの「どうしたらいいか」を共有できることです。また、PBSを全校規模で行うことで、集団を意識し、みんなの中で頑張っていることを意識できることと、自分で考えてより良い学校にしていこうという意識を持つことだと考えています。

学校には様々な解決すべき課題があります。私が抱えていた悩みは、朝のスタートがうまくきれず、元気がなく登校してくる児童が多かったり、学習準備が整わず、忘れ物をしてやる気の低下につながっていたりする児童がいることでした。これまでも、落ち着いて学校生活が始められるよう、朝の読書タイムや立腰の時間を設定してきました。その活動とともに、PBSの考えを取り入れた活動に取り組んでいくことで、より子どもたちが安心して過ごせる学校づくりを目指しました。

PBSの取組を始める上で大事なことは「組織体制」「具体的な説明」「児童理解」だと感じています。校長からトップダウンでおろすのではなく、組織の校務分掌の一つとしてPBSを明確に位置づけ、PBSはどういった考えなのか教員に具体的に説明して理解を得る。そして、児童理解を根底に、子どもの課題や何を身につけさせたいのか教員間で共通理解しながら取組を進めることが大切だと思っています。

その上で、取組を一過性のものにするのではなく、ブラッシュアップさせながら継続していくことで、現在本校では、多くの児童が元気いっぱいに登校し、あいさつすることができています。また、学習準備も整い、積極的に授業に参加できる児童が増えました。教員からも「子どもが変わっていくのが分かった」との意見もありました。教員と児童だけでなく、児童同士、教員同士でも認め合う雰囲気をつくることで、学校にいる全ての人が幸せになれる、PBSはそんな重要なツールだと考えています。



編集後記

本県は、平成二十七年に「発達障がい教育・自立促進アドバイザーチーム」を設置し、アドバイザーチームの皆様の多大なご協力とご指導の下、特別支援教育の充実を目指し取り組んできました。その中でも最も精力的に取り組んできたのが、「ポジティブ行動支援（PBS）」の普及です。徳島県教育振興計画第三期の数値目標に掲げ推進してきた結果、今年度、県内全ての公立幼稚園・小学校・中学校に浸透しました。近年においては、中学校における生徒会活動にPBSの考え方を取り入れた実践や、小学校の通常の学級における授業改善をテーマにした実践など、新しい実践が、様々な地域や校種で繰り広げられ、PBSの県内における深化は止まりません。

PBSの取組は各学校の実態に応じて実施するため、内容や形態はそれぞれです。しかし、共通している思いは、「全ての子とも先生が笑顔で毎日を通して」といふ思いです。先生方が望ましい行動に目を向け、「いいね!」「できたね」といったポジティブな言葉で溢れる園・学校が、子どもたちにとって居心地の良い場所なのではないでしょうか。

今、本県におけるPBSは新時代を迎え、ブラッシュアップのための新しいステージに挑戦しようとしています。子どもたちの「わかった」「できた」を育てるPBSが徳島の「あたりまえ」となることを目指して前進あるのみです。

編集 総合教育センター特別支援・相談課

研修動画案内

特別支援・相談課では、令和二年度からPBSに関する研修動画コンテンツをアドバイザーチームに依頼して制作しました。内容については次のとおりです（令和四年度未現在）。個人や職員研修等にご活用ください。

第3層支援について学びたい!

- チームで取り組む第3層支援(前編・後編)
- 問題行動に対する第3層支援～機能に基づく行動支援～
- 機能的アセスメントの方法
- 第3層支援における行動支援計画の立て方
- 第3層支援における行動支援計画の評価と修正
- 効果的に動機づけを高めるための「お約束」とポイントシステム
- 適切な行動を引き出す手立て(プロンプト)

PBSの基本を学びたい!

- ポジティブ行動支援(PBS)とは?
- ポジティブ行動支援の基本1
- ポジティブ行動支援の基本2
- 標的行動の決め方

PBS研修用動画 項目一覧

第1層支援について学びたい!

- ポジティブ行動支援の具体的な手立て①
- ポジティブ行動支援の具体的な手立て②
- ポジティブ行動支援の具体的な手立て③
- 学校規模ポジティブ行動支援①
- 学校規模ポジティブ行動支援とは?②
- 行動支援計画の解説
- 行動支援計画の作成
- 学校規模ポジティブ行動支援についてチームで振り返る

データに基づく取組と改善を学びたい!

- データの取り方
- ポジティブ行動支援におけるデータの取り扱い
- データの活用方法
- 課題分析

いつでもどこでも、誰でも、視聴可能です!

今までに発行したパンフレット・リーフレット



SWPBS
マニュアル



事例集 I



事例集 II



特別支援
まなびの広場へ

特別支援まなびの広場 検索
詳しくは総合教育センターホームページ



学年・学級担任
向け



保育者向け



保護者向け



管理職向け

【PBSに関する情報】

パンフレット等のデータ
実践事例データ
セミナー案内
研修用資料スライド
研修用動画
Q&A など

特別支援まなびの広場

「特別支援教育について知りたい!」「授業で使える教材がほしい!」「実践するためにどんな方法があるんだろう?」「そんながんばりたいあなたを応援するサイトです!」

教職員のまなび <ul style="list-style-type: none"> ・あどほいずタイム ・特別支援教育に関するFAQ ・特別支援教育に関するeラーニング ・議題による動画ハンドブック
子どものまなび <ul style="list-style-type: none"> ・学習教材eラーニング ・豆蔵の学習教材
ポジティブ行動支援 <ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット・リーフレット ・研修用動画 ・研修資料・教材例 ・Q&A ・実践事例
学校カウンセラーeラーニング <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校 ・特別支援学校 ・給食等の指導 ・不登校支援

特別支援教育の「知りたい!」情報が充実しています!

パンフレットについてのお問い合わせ

徳島県立総合教育センター特別支援・相談課

〒779-0108 徳島県板野郡板野町伏字東谷1-7 ☎088-672-5200 E-mail tokubetsushien@mt.tokushima-ec.ed.jp

■このパンフレットは、徳島県教育委員会「発達障がい教育・自立促進アドバイザーチーム」が執筆・監修しました。

全体監修 大久保 賢一(畿央大学教授)